

# 「強み」を磨け

「このままでは、じり貧になってしまつ。新しいことをやる。」

二〇〇二年、社長の有吉英二(五七)は「第二創業」とも位置付ける決断を下した。学校用の上履きや運動靴の專業から、高齢者や障害者向けの靴の開発に乗り出した。

高齢者用は面ファスナーベルトで簡単に着脱でき、軽くゆったりしたデザイン。靴底には、つまずきを防ぐための工夫も凝らす。新たな販路開拓などの課題はあるが、徐々に売れ行きを伸ばしている。

## ラッキーベル (神戸市)

創業は一九六一年。学校用の上履きなどに特化することで、安定成長してきた。足の甲に当たる部分が丈夫で脱いだり、はいたりしやすい二重織りゴムにした「前三角ゴムシューズ」は、特許も取得した上履きのロングセラーだ。全国の小・中・高校向けに納入するシューズは年間約百二十万足。全国シェアは推定14%

**データ** ゴム関連メーカーの組合の販売会社として神戸市長田区に設立。当初からベルマーク運動にも参加し、社名にある「ベル」の由来にもなっている。今年3月、兵庫県「ひょうご経営革新賞」の奨励賞を受賞。従業員30人。年商は約12億円。

## 靴の企画、販売



本社ショールームで高齢者向けのシューズを手に、新分野進出への意欲を示す有吉英二社長  
神戸市長田区神楽町4、ラッキーベル

という。だが、学校用の販売は、入学シーズン前に集中。少子化が進む。「学校用靴の仕事は、種をまいて収穫までに一年かかる農耕作業と一緒。それに耐えられる会社にしなれば」。九三年、

急逝した義父の後を継いだ有吉は、経営コンサルタントも入れ、社内体制を徹底的に見直した。「企画・製造と販売に徹底した方がいい」と、まず物流業務を外注化。大量の在庫を神戸市西区の倉庫に移した。それが会社の危機を救った。阪神・淡路大震災で長田区の旧社屋は全壊したが、商品は

被害を免れた。パソコンなどを取り出し、倉庫の一角で発送作業を続け、商品供給を絶やさなかった。震災後は生産のすべてを中国に委託。製造拠点は、山東省、広東省など四地域・八工場に散らばっている。工場分散は約二十年前に進出した韓国の工場での教訓を生かした。国内生産者の高齢化に加

## 健康、防災で第2創業

え、田高の進行をならみ、業界に先駆け海外工場だったが、火災に見舞われ、撤退を余儀なくされたのだ。

「完全に製造を海外に依存しているからこそ、現地でのリスク分散が重要」と有吉は話す。

〇三年四月、本社社屋を現地に移転、新築した。長年親しんだ社名も変更。当時の社名から「シューズ」の四文字を外した。「靴にとらわれず、幅広く事業に取り組みたい」と有吉。

昨年は基礎の強い防災マークを取得した子ども用防災ずきんを開発。学校用シューズは依然、主力商品だが、子ども、健康、高齢者、防災の四つをキーワードに次なる戦略を練る。

敬称略  
(村上卓百合)

続・光る企業